山と博物館

第26巻 第8号　1981年 8月25日　大町山岳博物館

腹の神送り（8月27日大町市三日町にて）　撮影　嶋田和美

腹の神送り

大町市三日町で、久しく途絶えていた「腹の神送り」と呼ぶ素朴な民俗行事が、三十何年かぶりで復活したのは、三年前、五十三年八月のことでした。稲藁で作った馬に、藁人形を乗せたものを、町内の子供たちが肩にかついで「ハーラノカミ、オークレ」と唱えながら、町外れの山中まで担ぎ上げ、置いてくる〝疫病退散〟を願う行事です。

一旦姿を消した行事が、再び日の目を見るようになった。きっかけは、町所有の古太鼓の皮が張り替えられたためでした。当時町の公民館長をしていた宮尾甲子吉さんが、「そういえば昔は、太鼓を使った腹の神送りがあったナア。今の子供たちにも、心に残るような素朴な行事を知って欲しいものだ」と、復活を思い立ったものです。

夏から秋へ―季節の変わり目は、一年中で最も食中毒が発生しやすいといいます。腹の神送りは旧暦七月二十七日、新暦だと八月下旬に行われますが、医薬が発達した現代と異なり、かつて赤腹（あかばら）と呼ばれた赤痢を始めとする腹の病は、時には命取りとなったであろうだけに、夏の終わりの腹の神送りは、欠く事のできない大切な行事だったのでしょう。同じ日に茅の箸で「うどん」を食べると腹の病にかからないという「茅箸（かやばし）」あるいは「青箸」の風習は、今でも多くの家庭で行われますが、腹の神―は、各地で折にふれ聞いてみましたが、「やっている」という答えは今の所返ってきません。大町市史編さんの過程で調査されると思いますが…。

藁人形は、九十歳を超えた町の古老が作ります。二、三度お目にかかった際「藁工芸を習いたいという人がいない」、「機械化で適当な稲藁が手に入りにくくなった」と話していました。時代の移り変わりと共に、素朴な民俗行事も、おいそれとは続けられない時がやがては訪れるのでしょうか。

（大糸タイムス記者　嶋田和美）

カモシカ考
―呼び名一〇三種の語源―

北村芳隆

さきに本誌上で紹介しましたニホンカモシカの呼び名九十二種類に、その後収集した十一種類を加えた百三種の呼び名の語源を追究してみたところ、一応七項目に整理できたのでその概要を抄録として紹介する。

七項目ごとの呼び名は第一表でとりまとめ本文中では集約した語源の代表語（接頭語または接尾語）のみをそれぞれの項目に掲げた。

一、形状・毛皮の利用面などから名付けられたもの

カマ・カモ・ニク・単角・一本角・ウシ・クラ・

カモシカの角は枝わかれしない。

(1) カマ

「かま志々、鎌に似たる故の名かと云う。いかが」としており、カマはカモシカの角の形状から命名されたとする説がある。二つ目の説は生息場所を意味するので後述する。

(2) カモの語源

拾遺和歌集②に、当時車の敷皮（羚羊皮）をカモと呼んでいたことを内容とする和歌が載っており、また日本釈名③には「カモは氈の字、けむしろ也。むかし毛むしろをカモと云う。ニクの皮を毛むしろにする故にカモシシと云う」とのべ、和名類聚抄④にも「氈、和名を賀毛、毛席は毛を撚りて席をつくる也」とあり、桃洞遺筆⑤にも「加毛之々は氈鹿をいう。氈の古名をカモという」と紹介、古名録⑥にも伊勢雑記に曰くとして「羚羊皮にて作りたるしとねをかもという」とのべている。（同趣旨の記録は日本産物志⑦、百品考⑧などにも見受けられる）。

最古の文献である日本書紀⑨の欽明紀や天武紀に「氈毯一領奉る、氈の褥」などの言葉も見受けられ、カモという呼び名はカモシカの毛皮に起因していることがわかる。

もう一つの説として中田⑩の「鴨にカモフラージュさせて獣肉を食べたことからカモという名がついた」という報告があり、このほかカマがカモに転化したという考え方もカモの語源に加えて差支えないのではなかろうか。

(3) ニク

肉そのものをさすほか、褥（とこしき）からきた呼び名である。桃洞遺筆によると「加毛之々は爾久とも云う。この皮をもって褥を作る故である」とし、日本釈名にも「羚羊、もしくは褥なり、羚羊の皮毛ふかくして褥（しとね）とするによし、故にニクという。」とのべている。（和爾雅⑪も同断）

一方、古名録にも家中竹馬記、後醍醐天皇の年中行事、江家次第、延喜式などの記述中の、にく、褥などが見出され、カモと同様、ニクは敷物から転化した呼び名であることが明確にされている。

(4) 単角・一本角

加藤⑫によると「一般にカモシカのことを単角、一本角というと、犀の角と同様に考えられ勝であるが、猟師がそのように呼んでいるのは、とくに叉の出ていない角という意味でいっているもの」とのべているとおり、角の形状に語源がある呼び名である。「中井⑬も同断）。

(5) ウシ

カモシカが牛科の動物で、角は小型であるが牛の角そっくりであることから隠語的に呼ばれた別名である。三重紀南地域では農耕地のウシと区別するため当初はヤマノウシと呼んでいたが、役牛が減少しはじめた昭和三十年以降になると単にウシと呼ぶようになったとのことである。（三重県熊野市　辻本力太郎氏談）。

ウシオニという呼び名は牛鬼の訓読みで、平山⑭によると「形は飼牛と同じく角あり、毛竝みはつるつるとし、人を害せず云々」と口伝を報告しているが、これも形態からきた呼び名である。

(6) クラ

生息場所を意味するほか、本朝食鑑⑮によると「世人、カモシカの皮にて障泥（したくら）をつくる云々」とあり、往時、カモシカの毛皮が鞍敷として用いられており、隠語的にクラシシ、クラシカなどと呼ばれていたことがわかる。

二、肉資源・肉の性質を意味するもの

ニク・シシ・アオ

(1) ニク

食肉から転じた呼び名。ニクという方言は九州一円と、四国の石鎚山一帯から大台ケ原山域を経て地質構造線に沿い、南アルプスに及ぶ範囲で呼ばれ、その語源は肉が美味であることにあり、ニクのニにアクセントをおくのが特徴だと加藤⑫が紹介している。（松山⑯、千葉⑰も同断）。

もう一つの語源として加藤は「ニクは一頭うちとると、二人分の日当に相当することから命名された。」とのべている。（山仕事などでは二人分（二日分）の日当のことを二工と呼ぶためニクとなったもの）

一方、松山⑯は「カモシカの怒ったときのふくらんだつらつきからニクヅラ（憎面）という言葉が生れ、それがニクになったのではなかろうか。」という猟師の見解を採り上げている。

(2) シシ

「シシは元来、肉を意味し主として食用獣肉をさす。猟りて肉をとるべき獣のことを広くシシと称し、野獣狩りのことを〝しし狩り〟と呼んだようにシシは獣肉をさす呼び名。」と東⑱はのべ、例として猪のしし、鹿のしし、氈ししをあげている。

(3) アオ

カモシカの肉が少々あお臭いことから呼ばれたとするもので、赤坂ほか⑲が紹介している。

三、体色・体毛の状態をあらわしたもの

アオ・クロ・クロンボウ・スス・ケブカ・チャチャ

(1) アオ

五説がある。その一つは河野⑳の「アオシシは毛の色が帯青灰色のあるにより名づけたるなり。」である。（白井㉔も同断）。

二つ目は「江戸期から昭和初期にかけては馬産地（奥州）では黒馬をアオと呼んでいたが、カモシカをアオと呼ぶのは黒馬になぞらえた隠語で体色からきたもの。」（白井氏談）。

ニホンカモシカの呼び名分類一覧表

一、形状、毛皮の利用面などから名付けられたもの。
カマシシ・カマシカ・カモシシ・カモシカ・カモシカモ・単角・一本角・一本角シカ・一本角のニク・ウシオニ・ヤマノウシ・ウシ（ニク・ニクシシ・ニクノシシ・ニクンボウ・アオニク・ニクバカ・クラシシ・クラシカ・クラシ・クラ）

二、肉資源、肉の性質を意味するもの。
ニク・ニクシシ・ニクノシシ・ニクンボウ・ヤマノシシ・ヤマシシ・シシ・ワカシシ（アオシシ・アオシ・クラシシ・クラシ・カベシシ・イワシシ・バカシシ・カマシシ・カモシシ・カモシ・アオ・アオニク・ニクバカ）

三、体色、体毛の状態をあらわしたもの。
アオシシ・アオ・アオシカ・アオシ・アオニク・クロ・クロンボウ・スス・ケグロ・ケブカ・チャチャ（アオケラ）

四、生息場所に関係するもの。
クラシシ・クラシカ・クラシ・クラヅキ・クラ・クランボウ・クラマキ・カベシシ・カベ・カベトリ・イワ・イワシシ・イワトリ・イワシカ・イソ・イソノトリ・ダケニク・ダケ・サトニク・サト・クランド（ヤマシシ・ヤマノシシ・カマシシ・カマシカ）

五、愛称またはこれに類するもの。
オドリシシ・ウタシシ・ニクバカ・バカシシ・アホ・カモブタ・クラップー・ノラシシ・シャンシャンシャン・シャンコ（ノロ）・オカル・オバケ

六、マタギ言葉に属するもの。幼獣名など特殊な呼称に類するもの。
〔マタギ言葉に属するもの〕
ケラ・アオケラ・ケラナ・キラ・サッペイ・コシマケ・ノロ・ホノコ（アオ・アオシ・アオシシ・クロ・クロンボウ・クランボウ）
〔幼獣名など特殊な呼称に類するもの〕
(1) 成獣名　ジシカ・マシカ・シカ
(2) 子一般の呼び名　シッケイ・イリコ・ツムジ・（ホノコ）
(3) 生まれたばかりの子　トーゼ・トーサイ・チチ・チヅコ（ツムジ・ホノコ）
(4) 一才の子　デワッコ・（ホノコ・チヅコ）
(5) 二才の子　ニセッポ・コゾッコ・（クラマキ・ホノコ）
(6) 三才の子　サンザイ・サンゼッポ
(7) 雌雄名その他　雌：クマン・（サッペイ）雄：シカゲ・（シカ）受胎しているカモシカ：サンゴ　夫婦づれ：アエメ

七、その他の呼び名。
カラシシ・ニワシシ・レイヨウ・シマシカ・ギュウキ・カノシシ・サンヨウ・ヤマヒツジ・グラグラ・パタパタ

三番目はアオシシは皮を剝いでなめすと、その皮裏が青く変ることからきたとする羽田ほか㉒の説、四つ目はアホという呼び名がなまってアオになったとする角田㉓の説、五番目はカモシカの顔、羊に似て遠方より見るに青色を呈すによりアオというとする本朝食鑑の記述である。呼び名のうち、アオシはアオシシの略称、アオケラのケラは獣・みの・獲物を意味する。

(2) クロ・クロンボウ・スス・ケグロ
いずれも隠語で、白井㉑によると「クロ・クロンボウは体色の黒からきたもの。ススも同じ」とのべ、一方、松山は体色のほか、角が漆黒色であることからクロと名付けられたと紹介しており、ケグロ（毛黒）とともに体色からきた呼び名であることがわかる。

(3) ケブカ・チャチャ
ケブカは毛深で、体毛に語源があり、チャチャは個体の中に茶褐色の体毛をもつものもいることから茶々と呼ばれたのか、あるいはカモシカが逃げるときに発するシャッシャという音からチャッチャ→チャチャに転化したか、体毛・発声に関係ある呼び名である。

四、生息場所に関係するもの

カマ・クラ・カベ・イワ・イソ・ダケ・サト・ヤマ

(1) カマ
「カマとは鎌のようにうすくやせて切り立った岩稜をいい、カマシシというのは断崖や岩稜などにすむ宍（獲物）の意であろう。」と白井㉔がのべている。

(2) クラ
クラとは元来、嵓・倉などを意味し、山腹などにある露出した大きな岩場をいい、カモシカはこのような場所にすむのでクラシシ・クラシカなどと呼ばれたもの。
一方、中田は「クラシシは鞍シシの意。山の鞍部でよく見られるため、つけられた名称でクラとは山の尾根をいう。」とのべ、いずれも生息場所からきた呼び名である。
クラシはクラシシまたはクラシカの略、クラヅキは山のクラに居付いている獣という意、クランボウはクラにすむ可愛い奴という意か、それともクロンボウがなまってクランボウになったとも考えられる。
クランドは鞍奴で、クラにいる奴との意、クラマキは嵓巻で、クラにはカモシカが多いのでカモシカの巻狩りをしたことから命名されたもの。（白井談）〔注〕クラマキは幼獣と成獣に対して名付けられている。

(3) カベ
カベとは壁、岩壁をさし、カベシシというのは岩壁にすむシシの意。（白井㉑㉔、冠㉕）

(4) イワ
イワとは岩石地をいい、カベ、クラと同様カモシカの生息場所をさす呼び名の接頭語である。
カベ・イワの語尾についているトリの意味について加藤は「けたたましく鳴くカモシカの声が鳥の鳴き声に似ているためイワトリになったもの」とのべ、鳥の種類については松山は「カシドリに似て、にく猟になれた猟師でさえ、一瞬とまどうほどである。」と紹介、また黒田㉖は「カモに似たる鳴き声」とのべ、鳥の鳴き声に酷似するとしている。

(5) イソ
イソは磯で、切り立った岩壁をさし、クラ・カベ・イワと同様、生息場所からきた呼び名である。

(6) ダケ・サト・ヤマ
ダケはダケニク、サトはサトニクの略称。ダケニクは岳ニクで標高の高い多雪の奥山にすみ、サトニクは里ニクで雪の少ない里山にすむ。（白井㉔、松山⑯）
ヤマは山、里にいる獣と区別するための用語。常陸国風土記㉗に、鹿は葦原の鹿、カモシカは山の宍として記述、ヤマノウシもこの例である。

五、愛称またはこれに類する呼び名

この項の呼び名は一～四項までの呼び名と異なり、接頭語・接尾語的なものはなく、それぞれ独立した呼び名であるのが特徴。

(1) オドリシシ
人が異装をして踊りながらカモシカに近よると、それに見とれて動かずにいるのでこの名がついたという。（柳田㉘）清沢㉙も同様に紹介しているが、遠山著聞集㉚には克明に捕獲のさまが描写されており、一読をおすすめする。

(2) ウタシシ
林㉛は「田植の早乙女達の歌う唄にカモシカがジイッときほれる習性があることからこの名がついた」と紹介している。オドリシシ同様、愛称名である。

(3) バカ・アホ
この項の呼び名は愛称というよりむしろ、小馬鹿にした呼び名である。大分県での聞きとり結果として千葉㉜は「ニクはニクバカといって銃でうっても命中するまで逃げぬ。」とのべ、白井㉑は「クマなどにくらべると、はるかに捕えやすいためバカシシとなった。」としている。

アホは阿呆で（角田㉓）、バカ同様、カモシカの無警戒さに対してつけられたもの。

(4) カモブタ

裏木曽国有林東股地区の呼び名で、雄なんか小牛ぐらいに見えると大作㉝が紹介、また倉畑㉞も「クマか子牛を思わせる豊満な肢体である。」とのべ、カモシカが毛深いため太って見えることから命名された愛称である。

(5) クラップー

奥利根地方の呼び名で、体色によってクロプー・アオプー・シロプーと呼ぶ。（飯塚㉟）語源はさだかでないが、クラは生息場所を、プーはカモシカが怒ったときにプウーと面をふくらませることからクラップーにしたのではないかと考えられる。

(6) ノラシシ

ノラクラしているシシという蔑称であろうか。（白井氏談）カモシカは俊敏さとのろまな両面があるが、一面をとらえた呼び名といえよう。

カモシカの幼獣

(7) シャン・シャンシャン・シャンコ

和歌山県小座川地域で収集、カモシカが逃げるときに発するシャッシャという音が語源となったようである。シャンはシャンシャンの略称、シャンコは愛称的に呼んだもの。

(8) オカル・オバケ

岐阜県安八郡の呼び名。オバケとは鹿猟や猪猟の折、思わぬ時に突然ヌッと姿を見せて猟師をびっくりさせることと、もし誤って撃つと、恐い（おそろしい目に会う：刑？）ことになるという意。

オカルはカモシカがなんとなく女性的に楚々とした風情があり、またどことなくあどけなく可愛い奴といった意味を含めた呼び名で、いずれも戦後の呼び名である。（岐阜、牧野典彦氏談）

六、マタギ言葉に属するもの、幼獣名など特殊な呼称に類するもの

マタギは山中で里言葉を使うのを忌み、ケモノに対して特別の言葉を使っており、個々の語源は専門家に委ねるとして、本稿ではおおまかに区分するにとどめた。（表を参照されたい。）

七、その他の呼び名

表に示した十種で、いずれも文献等に現われている呼び名であるが、語源が推定の域を脱しないものもあるので本稿では割愛した。

以上がニホンカモシカの呼び名一〇三種の語源の一応の追究と分類結果（抄）であるが、今後諸賢のご指摘、ご教示をいただいて補完して参りたい。

終りに当って多大のご助言をいただいた国立林業試験場、白井邦彦氏に対して厚く御礼申上げます。

引用文献

① 大槻文彦　言海　一八八九～一八九一年
② 花山法皇撰　拾遺和歌集　巻九　雑之部下　九八四年～九八六年
③ 貝原益軒　日本釈名　一七〇〇年
④ 源　順撰　和名類聚抄　九三一年
⑤ 小原桃洞　桃洞遺筆　一八三三年
⑥ 源　伴存撰　古名録　一八五〇年
⑦ 伊藤圭介　日本産物志　文部省　一八六七年
⑧ 百　菘撰　百品考　一八三九年
⑨ 舎人親王撰　日本書紀　七二〇年
⑩ 中田　敏　かもしか考　自然保護　一六二号　日本自然保護協会　一九七五年
⑪ 貝原好吉　和爾雅　一六九四年
⑫ 加藤数功　祖母傾山祥における熊の過去帳とかもしか　祖母傾自然公園開発報告書　一九五八年
⑬ 中井一郎　比良のけもの　比良　ナカニシヤ出版　一九七七年
⑭ 平山敏治郎　十津川　第十四章　母の名残りの言葉　奈良県教育委員会事務局、文化財保存課
⑮ 野　必大　本朝食鑑　一六九七年
⑯ 松山義雄　続々狩りの語部　法大出版局　一九七八年
⑰ 千葉彬司　カモシカ日記　毎日新聞社　一九七二年
⑱ 東　光治　万葉動物考　人文書院　一九三五年
⑲ 赤坂　猛ほか　カモシカ〈新潟県笠堀〉追われる〔けもの〕たち　築地書館　一九七六年
⑳ 河野鮎蔵　カモシカ・羚羊　史蹟名勝天然記念物調査報告書　3　長野県　一九二五年
㉑ 白井邦彦　カモシカの方言　動物文学　二九（二）　動物文学会　一九六三年
㉒ 羽田健三ほか　会津駒ケ岳周辺におけるカモシカ・クマ・サルの生活について　会津駒ケ岳、田代山、帝釈山自然公園学術調査報告書　日本自然保護協会　一九六二年
㉓ 角田　保　カモシカセンサスの実施について　ニホンカモシカの研究調査報告　三重県鈴鹿山系かもしか保存学術研究会　一九七〇年
㉔ 白井邦彦　山村猟師語彙　全猟　全日本狩猟倶楽部　一九五六～一九五八年
㉕ 冠　松次郎　黒部　第一書房　一九三〇年
㉖ 黒田長礼　野州塩原の生物界瞥見　植物及動物　四（一）　一九三六年
㉗ 全国　常陸国風土記　七二一年
㉘ 柳田国男　山村語彙（五）　山林　六〇〇　日本帝国山林会　一九三二年
㉙ 清沢晴親　長野県松本市誌　第一巻　第六編（三）　動物　一九五七年
㉚ 華誘居士　遠山著聞集　一五章　一七九八年
㉛ 林　清一　敦賀半島とかもしか　敦賀市教育委員会　一九六一年
㉜ 千葉徳爾　狩猟伝承研究　風間書房　一九六九年
㉝ 大作栄一郎　カモシカ撮影行　名古屋営林局みどり　二六（一二）　一九七四年
㉞ 倉畑守邦　マスコミ繁盛記　名古屋営林局みどり　二八（二）　一九七六年
㉟ 飯塚正幸ほか　野生動物　奥利根地域学術調査報告書　一九七六年

（林業専門技術員）

お知らせ

郵便振替の口座番号が左記のように変更になりました。お間違いないようお願いします。

長野四―一三二九三

山と博物館　第26巻　第8号
一九八一年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）